

「自ら新聞を通して、社会とより広い視野でつながることに
喜びや感動を味わわせることができる NIE 教育のあり方」

指定校 2 年次 原村立原中学校 飯野 敏行

I 本校新聞活用(NIE)の実態

新聞によせての実態(25 年調査)

- | | | | |
|----------------------------|---------------------------------|--------------------|-----|
| ① ニュースを知るために利用しているもの・・・テレビ | 60% | 新聞 | 24% |
| ② 新聞を取っている家庭 | ・・・85% | | |
| ③ 家族は新聞を読む | ・・・83% | | |
| ④ 生徒は新聞を読む | ・・・60% | | |
| | | 内容(テレビ・スポーツ・地域・政治) | |
| ⑤ 生徒が新聞を読むとき | ・・・暇なとき、大きな事件があったとき、
調べ学習のとき | | |

本校の生徒は、学習に取り組む姿勢は誠実で真面目である。与えられた課題に誠実に取り組んでいる。しかしながら、自分から問題意識を持って社会や周囲に関わったり、明確な理由をもとに自分なりの考えを説明や発信したりすることは、積極的ではない。しかし昨年 1 年目の実践として、まず環境面を整えたことにより、新聞に気軽に触れる機会が多くなり、しだいに生徒は新聞や記事があると、何気なく記事を読むようになってきた。



II 実践のねらい(育てたい力)

1 育てる意識

- ・社会を知り、社会とつながる存在であるための一つの大きなツールとして新聞があげられる。そのため、新聞が学校の中にあり、生徒や教師の共通の話題に上り、学校内のあちこちで共鳴が起こるような環境を作る。
- ・新聞を通して地域や生きる今を知り、社会とつながり、将来を生きる豊かな力を養う。

2 つける力

(1) 受信するようになる。(校内に提供されたものを読む)

- ・日々の出来事が、どのような形式でどのように書かれているか知る。
- ・新聞に書かれている内容を、各新聞社による比較をし、違いを考える。

(2) 発信するようになる。(校内に提供されたものの感想を書く)

- ・新聞記事を理解し、書かれている内容に意見を持ち、発表し合う。
- ・新聞という形式を理解し、自分の調べた内容や経験や情報を発信できる。

Ⅲ 研究の概要

1 昨年の取り組み

環境面を整え、新聞に気軽に触れる機会を多くすることから始めた。

①新聞が常に身近にあって触れることができるように環境を整えていく。

ア) 生徒が足を止めて、気軽に新聞に目を通すことができるように新聞閲覧台を設置した。

イ) 先生達による新聞記事紹介コーナーを設置し、生徒が気軽に付箋で意見を書いて貼れるようにした。

②教科でも新聞を取り入れ、授業内での新聞活用場面を増やすようにした。N I Eでの新聞学習の分類で考えると、国語や社会では、「A 新聞で学ぶ（読んで→使う）」総合的な学習の時間では、「C 新聞を作る（つくり→発信する）」に位置付く学習を行ってきた。

国語：A 「新聞の文章に学び、表現力を磨く」活動を行った。

- ・「意見文を書こう」信毎建設標 10 代からを読み、意見に意見を付ける学習。
- ・「コピーの効果」新聞の気になる見出しを集め、見出しの効果を考える。
- ・「新聞を学ぶ」新聞の構成・記事やリード文等について知る。
- ・「コラムの書き取り」季節の言葉や慣用句等言葉に関心を持つ。

社会：A 「新聞に掲載された中身を資料として活用する。知識や情報を得て授業を補ったり、生活を豊かにしたりする」活動を行った。

- ・信濃毎日新聞学習シートの活用
- ・公民 経済「株価の変化から企業の役割と意義を学ぶ」
- ・新聞スクラップ作り

総合的な学習の時間：C 「自分の課題を追求する姿勢を養う」活動を行った。

- ・「行事新聞を作ろう」1・2年生が新聞作りについて、割り付けや見出しについて講師から学ぶ。
- ・1年生「農業体験新聞」2年生「登山新聞」3年生「修学旅行新聞」を作る。

2 本年度の取り組み

昨年、新聞学習の3つの分類で「A 新聞で学ぶ」「C 新聞を作る」の2つを行ったことから、活動を継続させつつ、「B 新聞を学ぶ（知って→考える）」という残りの分類へと発展させ、『事実を正確に知る、比較する、考えを持つ』といった教科や学年で使える新聞活用のあり方を検討し、実践へとつなげていくこととした。

(1) 各教科において新聞を授業内でどのように活用できるのか。教科内で可能性を洗い出し、検討しなおし、授業の中で、資料として利用したり、文章を書く時の参考にと、有効な活用方法を追究した。

教科	新聞記事を扱った単元・授業とねらい	新聞記事の内容
国語	・「意見文を書こう」 分かりやすく考えを書く ・案内作り 効果的な見出し	・建設標～10代から～ ・記事の見出しと内容

社会	・「日本の中国侵略」 軍部の台頭 ・「太平洋戦争の開始」 戦線の拡大 ・「企業の役割と意義」 企業の役割と運営 ・「政治参加と世論」 政治参加方法と情報 ・「わたしたちの生活と現代社会」 情報化 ・「わたしたちの生活と現代社会」 少子高齢化	・五・一五事件、国際連盟脱退 ・ミッドウェー海戦を伝える ・株式市況欄 ・世論調査 ・ゲーム機械社のゲーム機利用者の個人情報流出 ・認知症高齢者が 300 万人に達し 10 年で倍増
数学	・「一次方程式」「連立方程式」 割合の問題に対する導入、復習	・世界の消費税について
理科	・「天気の変化」 低気圧の移動と天気の変化 ・「月の見え方」 月食	・天気図、長野県の天気 ・月食時における月の見え方の図
音楽	・鑑賞 様々な音楽	・演奏家、演奏会の紹介
美術	・鑑賞	・展覧会の紹介
保健体育	・「健康な生活と病気の予防」 感染症とその予防の中での資料として ・「文化としてのスポーツ」 国際的なスポーツ大会とその役割の資料として	・エボラ出血熱、デング熱関連の感染拡大や封じ込めについて ・東京オリンピック決定関連
技術	・「エネルギー変換」 電気を供給する仕組みやエネルギー変換技術における資料として、評価・活用を考える	・原発の稼働、停止に関わる記事 ・自然エネルギーについて自治体の取り組み ・新しい発電方法についての記事
家庭	・「食生活の情報」 食に関する情報の資料 ・「消費者として」 商品や生活の資料	・食品情報・食の安全・楽しい調理 ・特殊詐欺について
英語	・Lesson6「I Have a Dream」の King 牧師に関する導入用の資料	・「私には夢がある」 キング牧師演説 50 年記念

(2) 技術・家庭科【技術・情報】における授業事例

①題材名 「情報に関わる技術について考えよう」

②題材の目標

情報に関わる技術の発展と仕組み、安心安全に使うための決まりやルールなどの基礎的基本的知識を理解し、広く一般的な考えの新聞記事を読むことを通して、情報技術の課題を見つけ、今後社会がより良くなるための技術のあり方や関わり方について考えることができる。

③N I E の視点

新聞を活用し、自分の身近にある情報に関わる技術の実態について課題意識を持たせ、これからの技術の発展と活用の仕方について考えさせる。

④題材の展開概略 （全 1 2 時間）

第 1 時・・・・・・・・生活の中の技術、情報通信ネットワークの仕組み

第 2 ～第 6 時・・・・・・・・コンピュータ制御の仕組みについての演習

第 7 時・・・・・・・・情報伝達技術を安全に扱う技術

第 8 時(本時)・・・・・・・・情報技術の評価と活用について考える

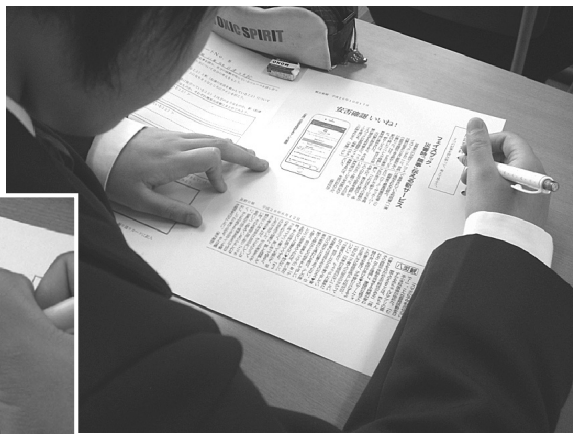
第 9 ～第 1 2 時・・・・・・・・コンピュータ制御の演習とプログラム制作

⑤本時の展開

主眼…情報伝達の仕組みや安心安全に使うためのルールについて学習した生徒達が、
新聞記事の情報に関する技術の光と影について着目し、実生活や社会的側面について、友と意見交換することを通して、自分なりの理由を明確にして、よりよい情報技術との関わり方について考えることができる。

指導上の留意点…内容としては、モラルの部分を含むが、使う側としてだけではなく、「情報技術の作り手」という視点からも考えられるようにする。

展開と生徒の反応

教師の発問・支援	生徒の反応
1. 情報伝達技術やルールについて想起する。前時使った画像を提示。	A 生「・・・・・・・・便利ゆえに危険になっている。」 B 生「・・・・・・・・便利になったけど、安全性が逆に失われている。」
学習問題：情報技術の発達は、私達の生活にどのような変化をもたらしたでしょうか？	
T：「技術の光と影の二面性について考えてみよう。比べて考える時に大事なのは客観性。世の中の記事をいろいろな角度から書いている新聞というアイテムを使うと手助けになるので、新聞を利用してみよう。」	
学習課題：新聞記事をもとに、自分達の経験や身近なニュースについて話し合い、よりよい情報技術との関わり方について考えよう。	
2. 新聞記事をもとに技術の光と影とはどのようなものか考える。 ①新聞記事をチェック ②光と影にあたる記事をそれぞれ端的にまとめる。	 

八面観

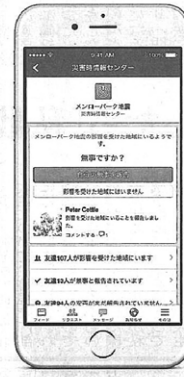
「スマホに子守をさせないで」。こんな啓発活動が日本小児科医会が始めた。「むずかる赤ちゃんにアプリの画面で応えることは、赤ちゃんの育ちをゆがめる可能性がある」「親子の会話や体験を共有する時間が奪われる」「なご指摘し、直接的な親子の触れ合いを呼び掛ける▼スマートフォン普及を受け、子守替わりにするようない方に警鐘を鳴らした形だが、一部には「子育ての大変さが分かっていない」「科学的な根拠がない」といった意見もあり、ちょっとした論争になった。苦勞しながら子育てをしている当事者には反発もあるだろう▼育児が大変なことば言うまでもない。仕事や家事にも追われる毎日。少しの間でも誰か子どもの相手をしてほしいと思う。自分自身も「スマホ」を「テレビ」に置き換えてみれば、思い当たる節がないとは言えない▼特に忙しい時、そんな時に限って「ちょっと待って」と言っても聞かず、足にまとわりつく。思い余って怒ると、火に油を注ぐ結果に。誰しも経験しているのではない。何とか気をそらそうと考える▼ただ、子どもにとって、親が忙しい時は自分が向いていない時。それを敏感に感じ取り「こっちを向いて」と訴えているのかもしれない。安易な方法で機嫌を取るのではなく、子どもが発する小さなサインを察知し、しっかり受け止める。そんな親子関係を大切にしたい。(高木敏雄)

フェイスブック、

災害時「無事」伝える新サービス

世界最大の交流サイト「フェイスブック(FB)」に、自然災害が起きたときに家族や友人の安全を確認できる新サービスが備わった。16日、FBが東京都内で開いたイベントで発表した。新サービスは、同日から世界同時に提供された。大災害が発生すると、その地域に居住する利用者に、フェイスブックが安全確認のメッセージを届ける。「無事」のボタンを押されると、「友達」として登録されている利用者へ一斉に通知される仕組み。創業者で最高経営責任者(CEO)のマーク・ザッカーバーグ氏が来日して新サービスを発表し、「これは日本の経験から学んだ。東日本大震災で、多くの人がFBで安全を確認していた」と語った。FBが世界共通のサービスを米国以外で発表するのは、今回が初めてという。(藤田知也)

安全確認 いいね!



「友達」の安全を確認するサービス画面

3. グループで話し合う。

T:「今、自分で『光と影とはなにか』考えたので、それをもとに、自分の経験、身近な人の経験、または聞いた話でもニュースで知った話でもいいので、4人で情報をたくさん交換し合い、光と影について考えてみましょう。」

グループ1 (災害の記事をもとに)

C生: スマホは光としてあるけど、影としてもとらえられるよね。

D生: なんで?

C生: スマホは利用している人だけの限定。急に災害があったときに、それ以外の人にとっては役に立たないよ!

E生: いざという時にいじってる暇ないよね。

D生: でも、ないよりある方がいいんじゃない。

E生: 家族の安全より自分の安全を考えなきゃいけないこともあるよね。

F生: だって御嶽山の噴火の時、あんな危険な中、録画している人もいるんだよ。それで命を無くすなら光ではないよ。

グループ2

G生: ツイッターやFBとか、SNSで自分の情報や経験を多くの人に見てもらえる。

H生: えっ? それって良い面なの?

G生: だっていいじゃん。一度に送れて楽だし。

I生: あれって、友達しか見れないの?

G生: いろんな人が見れるんじゃない?

H生: でも個人情報もれちゃうね。

G生: 相手の表情とかわからないし、必要以上に情報を公開しないこと

I生: 表現とかに気をつけた方がいいよね。傷つける言葉は言わないとか...

J生: 本当にこんな言葉を使っているのか、考えつつ

H生: うん、それがいいな。

4. 話し合ったことをもとによりよい情報技術との関わり方について自分の考えをまとめる。 5. 各グループ代表者による発表。	
K生：情報技術の発達により、技術を悪用する人が増えてきた。また、知らずに自分が罪を犯したり、人を巻き込んでしまったりしないように、正しい使い方を知って、便利なものとして技術を活用したい。 C生：便利になるにつれて、楽をするようになった。それはいいが、使う時に自分に害がないように安全に使うことで、まわりにとっても害を与えないことになるので、それがよりよい社会で安全に生活していくために必要なことだと思う。また、携帯などの情報機器に頼りすぎると、人とのふれ合いが薄れてきてしまう。直接顔を合わせることもとの違いも理解した上で使った方がいい。 A生：情報技術の発達は、便利になっていく反面、チャットなどでは相手の表情が見えなかったり、画面に集中していて、まわりが見えなくなったり、情報が流出しやすく、悪用されやすかったりと危険性が多いことを改めて感じた。しかし、情報を簡単に素早く、広範囲に発信することができ、簡単に確認できるというのはとても便利なものなので、光と影をきちんと理解した上で活用していくことこそが大事。	
5. 本時のまとめをする。 T：「今日、みなさんは客観的に見て物事を判断すること。特に技術なので、技術を評価することが行えた。技術を適切に評価して、これからどのように活用していくかというところまで意見を進める事ができた。便利だからただ使うのではなく、自分で適切に評価して活用していくようにしよう。」	学習ふり返しカードより ・情報技術の光と影について、自分の考えだけでなく、他人の意見も聴きながら深く考える事が出来た。 ・「光」を強くすると、それに比例して出てきてしまうのが「影」なんと思いました。これからはもっと便利になっていくんだと思うけど、影のリスクを減らした発達をしてほしいし、自分でも影の部分に気をつけて使っていきたい。

IV 研究のまとめ

今回の授業において、様々なメディアがある中で新聞を使用して分かったのは、映像だと視覚的に、また直感的に理解できるが、活字である新聞だとより細かな情報が集約されている上、気になる部分を自分のペースで読み返して、それをもとに考えることができるということ。実際、光とは？影とは？と何度も読み返して、自分なりの解釈を行う場面が見られた。そのことは、技術を使い手としてだけでなく、作り手として読み取り、意見を言う生徒もいたことから裏付けられる。

また、今回の新聞記事は、自分達に身近なものとして話合いの話題をだせるような呼び

水的なものとして位置づけていた。生徒達は、記事をもとに光と影を考えたことで、自分の身近なできごとを「～なことがあるけど、これは光（影）だね」といった会話もしていたことから、新聞を使うことで、社会に視野を向け、自分の経験も踏まえながら様々な角度からの意見が出ることにつながった。そして、その意見が、お互いの情報交換にもなり、考えを深めることにもつながっていったと思われる。これは、本校の新聞活用の目標である「新聞を通して、社会と広くつながる」ことにもあてはまる。

そして、新聞記事を授業内でどのように扱うか追究してきた点であるが、研究会では、同じ記事であっても教科や単元によって異なっても良く、それぞれの教科性、教科の見方によって指導が違って来るから、何をどう教えるのかということに沿って記事を活用することが大事であり、今回の技術の授業では、このような扱い方で良かったのではないかとご示唆を頂いた。新聞ありきではなく、「何を教えたいか」のねらいのもとで新聞を活用していけば、それぞれの教科における言語活動の充実も同時に図れるのではないかと考えることが出来た。

V 残された課題

環境面で言えば、まだまだ生徒は、新聞が身近にある状態が続かないと、もとのように新聞離れをしてしまうところもある。ひきつづき、教師も新聞記事を選ぶことを楽しみながら、その先生ならではの着眼点で選んだ記事を掲示し、生徒の興味関心を継続的に喚起していきたい。

今回の授業でいえば、「技術の光と影」であったが、意見としては「影」に対するものが多く、技術のマイナスイメージが大きかった。もっと技術の「光」に対しての考えを引き出す新聞記事を使った方が、より「技術の発展」という面でのとらえができて良かったのではないかとも思う。どの教科でも同じように、どんな記事に絞り込むのがよりねらいに近づけるのか、追究していきたい。